

歴史3 200年前のころ—解説—

江戸の町民の暮らし

写真は寛政年間（1789～1800年）ころの江戸の庶民がくらしていた町並みと、長屋の内部の復元模型（江戸東京博物館蔵）である。

江戸の町の発展は、1590年の徳川家康の「江戸打ち入り」にはじまるが、家康はここに幕府を開くと、諸国から町づくりのために職人や商人を呼び寄せ、江戸湾を埋め立てながら、都市を広げていった。

江戸の人口は100万人といわれ、当時、世界の都市の中では最大であった。そのうち、武士と町方の人口がおよそ50万人ずつで構成されていた。町方のほとんどの人々は、借家住まいで、職人や、天秤棒をかついで物を売り歩く商人であった。いわゆる「長屋」といわれた標準的な借家は、1家あたり間口9尺、奥行2間程度の空間が多く、井戸と厠は共用であった。

さらに、その町方の人々の居住地域は、当時の江戸の領域の1割程度の面積を占めるのみであり、残りの9割は武家地や寺社地であった。

現在も東京は、人口密度が非常に高いが、江戸は町方のみを見れば、超過密都市ということができよう。そのことは、「火事とけんかは江戸の華」といわれたように、火事が起こると、しばしば江戸の町全体を焼き尽くしてしまうような大火事となってしまった要因でもあった。その際、長屋住まいの人々は、いつでも逃げ出せるように、常にわずかな身の回り品を室内に置くだけにしていった。

★授業での使いかた

江戸時代の町人の一般的な生活について、具体的に実感させるときに活用したい。江戸時代の町人といっても、三井家や大阪の鴻池家のように裕福な町人から、一般的に町人と呼ばれた土地持ち・家持、地借り・店借といわれた比較的貧しい階層の人々まで、多様な階層があった。いうまでもなく、長屋住まいの人々が多数であり、その人々の活動により江戸の街が支えられていたことなどを、写真からとらえさせるようにする。

生徒へのアプローチ例—こんな発問が効果的！

- かわら屋根の家と石置き屋根の家にはどのような人々が住んでいたのでしょうか。
- 小さな小屋は何でしょうか。（厠やごみいれ小屋である）
- 石置き屋根の家は広さはどの程度でしょう。
- どのような生活道具があり、何に使用されたのでしょうか。
- どこで寝たのでしょうか。（寝るときは、畳を敷く）